

## 広川町内の熊野古道

### 1. 熊野古道とは

- ・平安時代から、京都鳥羽から大阪まで三十石舟で淀川で下り、天満(窪津王子)から熊野三山まで往路は歩いて参った。参詣道は、紀伊路・中辺路・大辺路・小辺路他があるが、町内には紀伊路が通っていた。
- ・上皇、法皇等が熊野詣をした道は御幸道と云われている。
- ・昭和 52 年文化庁から「歴史の道」に指定された名称で、正式に呼ばれるようになる。

広川町内に熊野古道の二つのルートが存在したと云われています。

一つは、湯浅町の久米崎王子から国道を南下して、新広橋手前を左折し、広川右岸に沿って柳瀬から井関への、**中世の古道**と云われるルート 1 と、湯浅町の島之内から広川を渡り熊野町を通り国道 42 号を超えて、広川左岸に沿って東中から殿への**近世の古道**と云われるルート 2 があったと云われています。

慶長六年(1601)、深専寺第八世の住職有伝上人の広川流路の改修によって、本流を現在のように 湯浅寄りに変換したので、二つのルートの古道もこの時、変わったと推定されます。

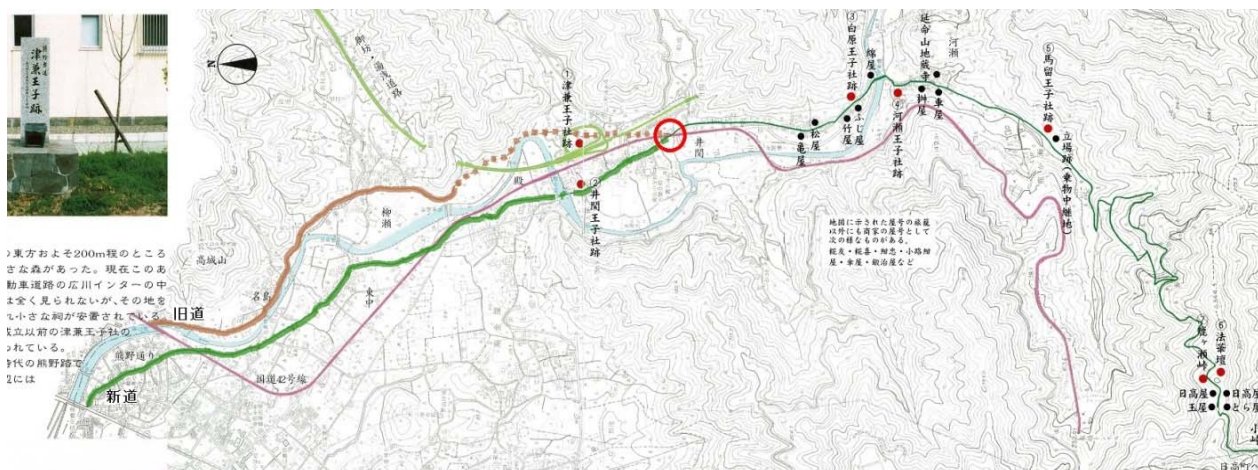
### 2. 中世の古道

中世の御幸道は、湯浅町の方寸峠を超え、山田川を飛び越え石で渡り、ほぼ一直線に、顕国神社神社の西方から、湯浅小学校の横を通り JR 湯浅駅の東方を通過して別所に入り、勝楽寺の横を通過して、国道を横断して久米崎王子に至り、国道を南下し、新広橋手前を左折して、広川町に入り、広川右岸に沿って、広川を渡らずに、新柳瀬橋手前を左折して、(今は通り抜け出来ない) 細い道に入り井関に至ったようです。このルートは、広川を渡らずに井関の宿場に至ったと思われれます。

### 3. 近世の古道

方寸峠を超えて、今の飛び越え橋を渡らずに直進し、山田川の右岸に沿って進み、北栄橋を渡って、直進し、道町を通り、お茶殿から島之内で広川に突き当たり、舟か仮橋で広川を渡ったと思われれます。ここからが広川町で、広川左岸を東方に進み、熊野町を通過し、国道 42 号に沿って少し進み次の信号で、国道を横断して、広川左岸を進み、名島から東中を通り、また、国道を横断して左に少し進んで、右折して細い道を、殿村に入ります。しばらく南に進むと、広川の左岸に突き当たります。今はないが、江戸末期頃には対岸まで井関橋(流れ橋)が架かっている、数十祀先付近には井関王子や一里松もあったそうです。井関橋を渡ってまっすぐ進み国道を横断した辺りが、中世の古道との合流点であったと思われれます。井関の宿場中を通り、河瀬橋を渡り河瀬王子社に至ります。(今は、広川を渡らず左折して国道に向かい、殿井橋を渡って、信号を左折して高速道路の下を通過して、高速の料金所内の津兼王子址から、また、国道に戻り、国道に沿って行き合流点に着きます。) 河瀬王子からは、大峠を通り、小峠が、広川町と日高町の町境になっています。ここから、古道最長の 503祀の石畳みが始まります。

## 旧道と新道のルート



### 4. 広川町内の九十九熊野王子（五所王子は、熊野神の御子神を祭神として祀る。）

九十九といわれているが、多いという意味で、王子社とは、熊野神を遥拝する場所、潔斎の場所とされる。王子に来ると休息場所としても使われた。時代が下がると、休憩所や宿泊所が付帯され、道するべとしても活用されたようです。

#### ① 久米崎王子(弘王子)



湯浅町にある王子であるが、天仁2年(1109)の「中右記」では「弘王子」となっている。奉幣のあと、川原で昼養し、出立している。建仁元年(1201)の「御幸記」の頃では御幸道から離れているので、遥拝をして通り過ぎたとあります。この頃になると、古道は広川に沿って進んだようです。鎌倉時代にこの王子社が破損し、幕府が湯浅宗景に修復を命じ、頼宣も修復しているが、その後、衰退した。明治41年顕国神社に合祀。

#### ② 井関王子



井関王子は近世の熊野古道にあり、新柳瀬橋を渡って南に進み、広川に突き当たったところに架かっていた井関橋(流れ橋で今は無い)を渡った、対岸の先の左側にあった。この地は、地元の人たちから「王子田」とよばれ、開墾されるまでは、社もあったという。

この手前付近に、両側に松を植えた一里塚(若山から七里)もあり、熊野街道が西に寄って近世の街道となったため、現在の井関王子は、東にある津兼王子の遥拝所として、設けられたとされる。

### ③ 津兼王子



藤原定家は、御幸記で10月10日夜明けに雨の中を発ち、久米崎王子を遥拝し「…次に井関王子に参る、此所に於いて雨漸くやむ…」と記す。前述したとおり井関王子と記されているが、現在の津兼王子のことである。王子名が改称されたのは江戸時代とされるが「和歌山県聖蹟」では「御幸記に井関王子の名をもって記されているのに、何故に津兼王子と改称せられるに至ったのであるかは、その理由は明らかでない」と記さ

れる。この地に津兼池があるので、津兼は地名からではとも思われる。

津兼王子の祠は、珍しい小さな瓦製である。

### ④ 丹賀大権現(白原王子跡)



藤原宗忠は天仁2年(1109)の「中右記」で、弘王子社(久米崎王子と思われる)に奉幣し広川の川原で昼養後、出立して「…「白原王子」に奉幣、件の王子近代初めて出て来る、その験ありといえり次登鹿瀬山…」と記す。この92年後、定家の御幸記では久米崎王子、井関王子、河瀬王子となっていて白原王子は記されていない。白原とは、今もある小字名の白井原からの転

訛と思われる。平安末～鎌倉初期にかけて、王子が増設されたり、整備される時期であったとされる。

### ⑤ 河瀬王子(平成27年に国の史跡に指定される)



江戸時代の村名から河瀬(ごのせ)王子と呼ばれた。前身は白原王子で、ここに遷座された。王子名もツノセ(御幸記1201)、角瀬川(修明門院参詣記1210)、津の瀬(熊野道中記(1722)・熊野詣紀行(1798)等)、川瀬(紀伊名所図会(1811)・紀伊続風土記(1806～1841)等)、角瀬(南紀?社録)等の別名があり、明治時代は川瀬王子神社と云われていた。明治41年に津木八幡神社に合祀さ

れた。今も、巨石が横たわっており榎大木などが繁り、王子社の古態を伝え残されているように思われます。紀行文には、時代により名前が変わって書かれているが、それだけ、多くの人が立ち寄り、名に聞こえた、明日の「崔嵬の陰阻」の鹿ヶ瀬峠越えと、旅の安全を願い、お詣りしたと思われます。

王子の前に自然石の道標がある。「右はきみいでら 大水にはひだりへ」とあり、大水で川が渡れない時や、板橋が流された時、山裾を通過して広川口に行けた。

今の河瀬橋より、30 程上流にあった流れ橋を渡って河瀬王子に至った。

## ⑥ 汗かき地蔵（浄土宗西山派）



古道左側の小橋を渡った所に「延命山地蔵寺」がある。本尊の地蔵菩薩は、161.8cmもある木像寄木造りで、顔の辺りに漆下地が所々剥がれ、めくれあがっているのが見える。

その様子が汗をかいたように見えるところから、いつの頃からか「汗かき地蔵」と呼ばれるようになった。このお寺は、鹿ヶ瀬峠の登り口になっていて、峠を上る人が身体が弱ってくると、後から背を押してくれたので汗をかいたと云う言い伝えがある。この寺に数少ない西国巡礼三十三度行者満願供養塔があります。

## ⑦ 東の馬留王子(沓掛王子)



御幸時代の藤原定家や藤原頼資の日記には、「馬留王子」の記載がなく、それよりも新しい王子社と思われます。江戸時代に書かれた若山から熊野までの『熊野道中記』には、津の瀬王子の次に、沓掛王子、次に鹿ヶ瀬山が載せられており、この王子は「沓掛王子」と呼ばれていたようです。が、『紀伊続風土記』では、沓掛王子というのは誤りで、馬留王子社と書いています。以降、この王子社は馬留王子社といわれ、明治時代には、馬留王子

神社となります。が、神社合祀で、津木八幡神社に合祀されました。

日高町の原谷に「西の馬留王子」があります。此処には、徳本上人の三十三回忌取越し供養した記念の名号碑がある。ここで道が二つに分かれ、左へは津木村のふじたき念仏堂への間道となり、右はくまの道と刻まれている。また、立札・高札を立てたり、休憩所であったり、馬や駕籠の調達の場所でもあった。隣に「立場」という屋号の家もあった。

日高町の原谷に西の馬留王子跡がある。

## ⑧ 痔の地蔵（縛られ地蔵とも言う）



頂上に近い左側の小高い所に、椎の大木を背に道標を兼ねた地蔵さんがある。これが何時からともなく、「痔の地蔵さん」と呼ばれ、水と米を供え、願をかけて持ち帰り粥にして食べると、痔が治ると伝わる。ここで、今昔物語に伝わる逸話に、昔、武士の父娘連れが、山路での起こった話の伝承がある。またこの地蔵は「縛られ地蔵」とも呼ばれ、行方不明の人や、家出人を探すのに靈感があり、荒縄で縛って願をかける。見つければ地蔵さんを縛っていた縄を解いてあげる習わしであるという。数十年前には、生き

て或いは、不帰の人となって、何人か見つかったという。

### ⑨ 法華の壇



「元亨釈書」に著されるお経を読む髑髏の伝説。  
千年も昔、叡山の僧、壱叡が峠で一夜の宿をとった所、夜中に法華経を唱える声が聞こえ、一巻終わっては礼拝懺悔、また、一巻を読む。毎巻これを繰り返す。誰か同じ様に野宿している人の声かと思っていたが、夜が明けても他に人は居らず、傍らに白骨が横たわっていた。すでに苔が衣服を着けたように見えたが、よく見る

と口の中に紅く蓮の花のように見える舌があった。これにはきっと訳があるに違いないと、そこで、その日は去らずさらに一泊すると、やはり夜中に読経の音がする。

翌日、白骨に事の次第を尋ねると、この白骨の主は、生涯に法華経六万部を詠む誓願をたてた比叡山の僧、円善で、志半ばにしてこの峠で倒れたが、今もこうして読経を続けている。間もなく終わりに近づいたが満願の後には弥勒菩薩の浄土：叡山にもどるといふ。壱叡が後日訪れた時に白骨はすでになかったという。壱叡が円善の果てた此処に、塚を築いて供養した場所を「法華の壇」と呼んでいる。この地は、養源寺の寺領として、石塔を建て毎年四月に、宗祖日蓮上人供養塔の前で、「円善まつり」と呼ばれる法要が行われている。

### ⑩ 大 峠（鹿ヶ瀬峠）（平成 27 年に国の史跡に指定される）



鹿ヶ瀬峠越えは、標高 350 ㍎の熊野路最大の難所の一つで、鹿瀬山は、山容が鹿の背に似ているので鹿の背(ししのせ)と呼ばれ、いつからか鹿ヶ瀬(ししがせ)に変わったものと云われている。大峠頂上は、広い敷地に「とら屋」「たまや」「日高屋」などの茶屋・旅籠が十数軒あり、日に五百人位の人々の往来が常にあり、賑わいを見せていた。が、道路の整備や交通機関の発達と

ともに、急に衰退し、昭和 4 年に紀勢線の開通と共に人通りが途絶えた。

古道の西峰づたいに小城山(標高 408 ㍎)があり、そこに鹿ヶ瀬城があった。楠正成の流れをくむ三段構えの砦だったと云われる。治承 5 年(1181)鹿ヶ瀬荘司が築城、後、永享 10 年(1438) 9 月南朝方の残党と、畠山氏の激しい、峠での戦があったと云う。

峠で殿さんが休まれる場所は御屋敷と呼ばれていた。また、平安時代の僧の増基法師もここで歌を詠んでいる。峠でその峠の盛衰を見てきた、唯一残っている樹齢数百年と云われる椎の大木が、今も静かに見守っている。

### ⑪ 小 峠



広川町と日高町の町境で、ここから 503 ㍎の古道現存最長の趣のある石畳みがあり、石は不揃いで、曲り角は広くとり人馬等が曲り易くしている。この辺りの石畳みは江戸時代初期に設置されたらしい。ここには道標を兼ねた「夜泣き地蔵」があり、その前に茶屋を営んでいた岩崎氏の屋敷跡がある。左に行くと、津木の猪谷に下る。

## 5. 熊野御幸

### ①上皇・法皇の熊野参詣(熊野御幸の目的)

- ・ 貴族は兵力を持たず、参詣経路の豪族を兵力として担保する必要があった。
- ・ 永承7年(1052)で末法の時代に入ることから、その救済を熊野神に求めた。
- ・ 過去世の救済・現世利益の授け・来世の善処を祈願した。
- ・ 僧側は政治と結び力を持ち、院の帰依で支援を得ようとした。
- ・ 貴族所領の荘園の検分。

### ②熊野御幸のようす

- ・ 上皇や法皇は多くの貴族を従えて熊野に向かった。
- ・ 御幸の行列は814名を数える記録もある。(白河法皇の第4回目)  
通常は200人前後であった。
- ・ 物資は貴族の持つ荘園から提供させた。

### ③熊野参詣(院の御幸)

- ・ 熊野は古くから人々の熱い信仰に支えられた聖域であり、「伊勢へ七度、熊野へ三度」と言われているほどである。本宮の地に神が祀られたのは、およそ2000年前、第10代崇神天皇の世といわれている。熊野詣が盛んであったのが、平安時代の末期から鎌倉にかけてと伝えられており、延喜7年(907)の宇多法皇以来、法皇上皇の熊野御幸がはじまり、弘安4年(1281)3月、龜山上皇の御幸をもって終結をつけている。平安末期の浄土信仰の広がりから、盛んになる。

「恵み・繁栄・循環・再生を授かる聖場、身分を問わず、生きて浄土が見られる。」

## 6. 蟻の熊野詣と信仰

江戸時代に入り、元和5年(1619)、紀州藩主徳川頼宣が熊野三山の復興に力を入れ、再び「蟻の熊野詣」の最盛期を迎えることができたといわれている。身分や階級を問わず、多くの人々が熊野に憧れをいだき、救いを求め、蘇りを願って異郷の地とも思える山深いこの地を目指しました。

近世の蟻の熊野詣では、上下／貴賤／男女を問わず、難行苦行する事で功德が得られる。熊野に、この世の極楽浄土を見た思いだったのかもしれない。地の果てとも言われる熊野三山が、熱狂的な信仰をあつめた要因の1つは、「熊野権現」は神仏一体であり、貴賤男女の隔てなく、浄不浄を問わず、なんびとも受け入れたことであるといわれている。人は絶望の淵から再生を念じて熊野を目指したのであろう。中世の人々の心を掻き立てた熊野は実に不思議な地である。長い歴史の中で数多くの蘇生のドラマをプロデュースし、今も甦りの地として人々の祈りが続いているのである。

熊野御幸の記録（広川町内通過）

| 上皇・法皇 | 初年         | 終年         | 回数  |
|-------|------------|------------|-----|
| 宇多    | 延喜7年(907)  |            | 1   |
| 花山    | 永延元年(987)  |            | 1   |
| 白河    | 寛治4年(1090) | 大治3年(1128) | 9   |
| 鳥羽    | 天保元年(1124) | 仁平3年(1153) | 21  |
| 崇徳    | 康治2年(1143) |            | 1   |
| 後白河   | 永歴元年(1160) | 建久2年(1191) | 34  |
| 後鳥羽   | 建久9年(1198) | 承久3年(1221) | 28  |
| 後嵯峨   | 建長2年(1250) | 建長7年(1255) | 2   |
| 龜山    | 弘安4年(1281) |            | 1   |
| 九院    | 907~1281   |            | 98回 |

※ 374年間で、九院で98回の参詣、全盛期は、太字の五院で93回の参詣。

【参照】 蟻の熊野詣の裏に潜むもの 吉田元重

・往路行程 起床：5：00

出発：夜明けともに出発し、王子に参る。

昼食：12時。休憩後、王子に参る。

夕食：17時

・終身：雑魚寝

・食事：精進料理

・夜：歌会

・復路行程 帰途：帰途に関する詳細な記録は少ない。

大雲取(20km)⇒(小雲取)(20km)→中辺路

急勾配で狭い山越の道

定家は木の根につまずいたと記す。

6日間で帰京：途中、王子に参拝することもなく、夜間も歩いた。

：一日に52km程度を歩いたのでは…。

※帰路はどこにも寄らず、那智から妙法山の傍を通り、大雲取・小雲取峠を越え、夜中も歩き、一目散に京都に向かった。一日52kmも歩き、約6日で帰還したと云われている。往復約一か月の長い御幸であった。病弱であった定家はほっとしたのであろう、やっと家に帰り付き魚を食べ、洗髪し沐浴し、翌日洗濯をしたと記す。それほどきつい御幸であったようである。

令和6年7月23日

森 勲